

## 紹介

水口辰次郎著

### 丹波山国隊史

山国という名を冠した地名は、丹波の山国村（現京都府北桑田郡京北町の一部）だけらしい。山国村といえは、古くからの禁裏御料であり、江戸時代には京都への材木の供給地でもあった。しかしそれより明治維新のときの山国隊の活躍が有名であろう。明治維新の性格を知るためには、薩長両藩などのいわゆる討幕諸藩の活躍をあきらかにするだけでは十分ではない。山国隊のよ

うな文字通りの「草莽」の兵士たちの活躍の意味も大変重要である。それまで政治の世界にまったく関係させられなかった階層の人たちが、精一杯に活躍したのが維新の変革であるとするならば、山国隊の働きはその縮図であろう。

本書は、そうした山国隊の歴史を精細に叙述している。従来この山国隊について知ろうとすれば、明治三十九年に出版された永井登著『丹波山国隊誌』（本書に付録として収載）がほとんど唯一のものであった

が、本書は、地元出身の著者（東京高師の卒業で、刊行の直前に八十二歳で永眠された由）が、地元に残された史料（隊員盟書・山国隊日記・征東日誌など）を駆使されて著述されたものだ。だが本書は、地方史関係の書物にありがちな地元の史料だけで叙述するのでなく、維新史の基本文献にもよく精通されて、全体の維新史のなかに山国隊の活躍を位置づけようと努力されている点は特筆する必要がある。

それにもう一つの特筆される点は、空間的なひろがりだけでなく時間的なひろがりななかで山国隊史が書かれていることである。古代以来の山国村の歴史を、「第一編 山国隊前史」として「第二編 山国隊本史」の前においている。山国隊が活躍する歴史的な背景をあきらかにしようとしておられるのだ。それに「第三編 山国隊後史」まで用意されている。そのなかのエピソード一つ。山国隊の行動費は全て自前であったが、同隊は便宜上鳥取藩に付属したので、その費用のための借財四千二百五十兩の大半を同藩から借用していた。

だが読んでいて不満がないわけではない。一つは、一般史の叙述がいささか繁にわた

りすぎてはいはないかということであり、もう一つは隊員個々人の働きやその村での状態などをもう少し具体的に書いてほしいかたというところである。

ともあれ詳細な年表まで付せられた本書は、これから山国隊について知ろうとすれば、まず第一に読まなければならない書物になることは間違いない。

（A5版 本文九四〇頁 付録行動年表史料 等一五〇頁 昭和四十一年四月 京都府北桑田郡京北町山国護國神社刊）

（池田敬正）

### 狭山町史 第二巻 史料編

河内狭山は狭山池の名とともに歴史家にとって印象深い地名である。狭山池は早く崇神六二年紀、垂仁紀にみえる伝承の池である。元禄には水下七五カ村四万七千石の地を灌漑していて、河内の農村に欠くことのできないものであった。また秀吉の小田原攻めによって滅びた関東の雄北条氏が、ここで万石余を許され、名家の余流をたもっていた。その近世における歴史は、畿内小藩の典型ともいべきものであり、苦闘